対話を始める

現場の先生のための
「進路指導」相談講座

— 第4回 —

取材・文／塚田智恵美
撮影／平野 愛

進路指導の場面で悩む場面、ふと立ち止まる瞬間があっても、立場上、なかなか率直に相談できる相手がいなくて、お困りの先生方も多いはずです。カウンセリングの領域では、カウンセラーが自身の担当する個別のケースについて、熟練した指導者と対話し、自身のカウンセリングの過程や問題点を振り返ることで、より良いカウンセリングのあり方を模索する手法があります※。この連載ではキャリア・カウンセリングの専門家である三川先生と現場の先生方の対話を通じて、現場の先生ご自身が「よりよい進路指導のあり方」を考えていく様子をレポートします。

※「スーパービジョン」という手法。事例をもつカウンセラー（スーパーバイジー）と指導者（スーパーバイザー）で行う。

監修&アドバイス

追手門学院大学心理学部
教授
三川俊樹先生

追手門学院大学心理学部教授。カウンセリング心理学専攻。大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了（学術修士）。スーパーバイザーなどとして活躍。2023年5月まで日本キャリア・カウンセリング学会で理事・SV委員長を務めた。

CASE.4　公立の中高一貫校　クラス担任　大浦先生（仮名）　50代前半

変化の激しい時代。これから社会に出ていく生徒たちには、受け身ではなくみずから考え、動き、仕事を創り出していくような思考力や主体性が必要だと考えています。しかし、進路選択の時点から自分で考えようとせず「親に言われるがまま」の生徒がいて…。

高3の
生徒Dさん

両親が共に公務員なのですが
親から「公務員になったほうがいい」と言われたので、そうします。
親が大学・学部についても調べてくれて、志望理由書も一緒に書いてくれるそうです。

大浦先生

…あなたはそれでいいの？　本当は自分の興味関心や適性をふまえて、進学先も仕事も考えてほしいのだけど…。

生徒のほうも「親の真似をすれば大丈夫」と考えていそう。

私には、その分野や職業にまったく興味がないように見えるのだけど…。

親が子どもを誘導しているのでは？

担任の私には「その学部での学びにも興味がなさそうだし、本人の適性がまったく考慮されていない」というように見えて心配になりました。自分と同じ職業になったほうがいいと押しつけてしまう保護者、深く考えずに言う通りにしてしまう生徒、どちらにも問題がありますが、同時に教員である私たちも、従来型の進路指導から脱却できておらず、受け身で無難な生き方を誘導しているのではないか、と悩ましく思っています。

次ページではこのケースについて、三川先生と対話していただきました。

課題山積の進路指導現場でも できていた対話と、不満の形をした希望

三川先生

保護者が進路を誘導している。生徒のほうも深く考えようとせず従ってしまうことに、もどかしさを感じていらっしゃるのですね。

大浦先生

保護者も生徒も、今の社会を知らなすぎると感じます。でも、従来型の進路指導を続けている私たちにも問題がある気がして…。

親の時代の成功体験を押しつけないで…

大浦 良かれと思って保護者が子どもの進路に口を出しているのですが、「生徒本人の意思や適性をちゃんと見ているのかな？」と不安になります。なかには志望理由書を保護者が書いてくるケースもあるんです。

三川 なるほど。そうしたケースについて特にどんな点が問題だと、大浦先生は感じられているのでしょうか。

大浦 「私たちは公務員を選んで良かったから」と保護者が自分の成功体験を押しつけているところです。保護者が生きてきた時代と、今は違うはずなのに。

三川 社会は大きく変化しているのに、親が自分たちの考えを押しつけているということですね。

大浦 そうなんです。これだけAIや情報技術が猛スピードで発達しているのだから、公務員といっても親とはまったく違う仕事をすることになるかもしれない。今ある職業がなくなったり、形を変えていったりする時代です。なおのこと生徒自身が主体的に選択して生きる力をもたないと。

三川 大浦先生自身が、そのときの進路指導を振り返って「もっとこうしたかった」と思うことはありますか。

大浦 その生徒と、もっと時間をかけて対話したかったです。生徒自身にもっと深く考えてほしかったし… **そもそも私自身、生徒と向き合い、深く話す時間が足りなかった。今考えれば、それが心残りですね**（気づき①◀）。

気づき①

このころ、ちょうどコロナ禍ということもあって、進路指導にかけられる時間に限りがありました。さらに年々、教師のやることが増えており、生徒一人ひとりともっと時間をかけて話せれば、より良い進路選択につながるはずなのに…と不満が溜まっていることに気づきました。

「対話不足」を嘆く先生がしていた意外な「対話」

大浦 そもそも進路を決めるまでの過程に問題があると思っています。現行のスケジュールでは、高1の間には文理選択をしなければいけない。我々教員が、教科書を手配する都合があるからです。大人の都合が優先されて、生徒が将来就きたい仕事や適性について調べたり考えたりする時間が取れていません。

三川 あらゆる点で時間が足りない。でも、そんな環境下でも、みずから進路を考え、選択していく生徒さんもいらっしゃる？

大浦 はい。よく考えているな、と思う生徒は何人もいます。例えば、ある生徒は、日本の農業が抱える課題を知って心を揺さぶられたのか「将来、農業に従事する人たちの力になりたいので、農学や経営学を学びたい」と言い出しました。

三川 社会課題に目を向けて、自分のやりたいことを見出したんですね。

大浦 そうなんです。ほかにもロシア・ウクライナ戦争のニュースをきっかけにエネルギー問題に興味をもち、資源工学を学んで研究職に就きたいと語った生徒もいました。

三川 そんな生徒さんがいらっしゃるということは、大浦先生はクラスの生徒たちが社会に目を向けるために、何か心掛けていらっしゃることがあるのでは？

大浦 …そう言われてみれば、週ごとに気になる身近なニュースや、世界情勢の動向など、何かピックアップして、生徒たちに共有しています。「こんなニュースがあったよ。あなたはどう思う？」と書き添えて。スマホで情報を取得していると、自分の興味のある話題ばかり入ってくるので、生徒たちの視野を広げられたらと。

三川 どう思う？と投げかけられて、生徒たちは自分のなかで思考を深めている。**一方通行のメッセージに見えて、その共有は先生と生徒との「対話」になっているのではないですか？**（気づき②◀）

大浦 そうでしょうか。そうだったらいいな、と思うのですが。

気づき②

少しでも生徒たちの視野を広げたい思いでニュースを共有してきたのですが、それも生徒との「対話」なのだと気づきました。実際、生徒が「あのニュース、考えさせられました」などと応じてくれると私も嬉しいです。時間が限られているなかでも、できることはある、と思えました。

一対一で向き合い、話すことだけが「対話」なのか？

親の言う社会の「外」とつながる方法を考える

三川 本来は親子で対話しながら、生徒自身が自分のもっている課題意識や、社会とどのように関わりたいかの思いを親に伝えていけるのが理想です。でも、残念ながら、そのような対話の機会を、なかなかもてない家庭も多いですね。

大浦 だから、高3を担任していると「成年年齢が18歳に引き下げられて良かったな」と思うことも、時々あります。

三川 どういうことでしょう？

大浦 18歳の誕生日を迎えるのを機に、親と少し心理的な距離ができるのか、良い変化を遂げる生徒もいるんです。親と進路の話がまったくできないほど、親子関係が悪化していた生徒が、18歳になったのを境に、三者面談などでも親に向かって自分の意見をはっきりと言えるようになったことがありました。「成人になるということは、親の同意がなくても、自分の意思で進学や就職の決定ができるんだよ」と以前話したことがあったので、それを覚えていたのかもしれません。

三川 法律に背中を押されるようにして、親との間に適切な距離ができて、生徒自身の自立心が育まれているのですね。生徒が「親は親。自分の進路は、自分で決めていいんだ」と気づくと、対等な対話ができるようになっていくのでしょう。

大浦 精神面で親から自立できると、自然と、親が言う世間や社会の「外」に広がっている世界にアンテナが向く。**そうやって自分と、今の社会とのつながり方を考えている生徒は、おのずと自分の真の興味関心や、適性に合った進路を選んでいるような気がします。**（気づき③▼）でも…正直、学校の進路選択のスケジュールが改善できれば、もっと時間をかけて世の中に目を向けさせられるのに、とやりきれない思いも強いです。偏差値を重視しすぎる従来の進路指導そのものを見直していかなければ。課題が山積みです。とにかく時間が足りない、十分に対話しきれないという焦燥感が…。

三川 向き合って話すだけが対話ではありません。私自身、カウンセリングをしていて「もっと時間があれば」と思うことはあります。それでも最後は「やれることはやった。あとは、きっと自分の力で乗り越えられるはずだ」と祈るようにして手を離す。きっと面談以外でも、大浦先生はたくさん生徒に働きかけをされていらっしゃるはずです。これからも、生徒の受け取る力を信じてあげてください。

親から自立して、自分の将来を深く考えられる生徒は何が違う？

気づき③

いろんな生徒の話をしているうちに、みずから深く考えて、進路を決めていく生徒たちにはどんな共通点があるか、私なりの考えが言語化できました。視野を広げて、社会で起きている出来事や課題に目が向くと、自分と社会との「つながり方」を考えるようになっていくのだろうと。

三川先生との対話を終えて 現場の先生が振り返る

「親が、この職業に就くと良いと言ったから」と話す生徒が挙げる職業はほぼ決まっていて、医師、看護師、教師、弁護士などの国家資格や公務員ばかり。昔なら安泰と言われたかもしれませんが、本人が深く考えもせず、やる気や適性がない状態では、希望する大学や学部に入れたとしても続かないのでは？と、もどかしく思っていました。

今回、三川先生とお話しして、生徒自身が社会とつながることが非常に大事だと実感しました。ニュースの共有が、その一助になっていたのは嬉しかったです。逆に言うと、自分の世界に閉じこもっていて、社会から取り残されている生徒は、親が言うことを素直に聞いて、まるで自分の考えのように錯覚してしまうことがある。そんな状態に陥っている生徒に、今の社会を知る糸口を与えるのは私たち教員の仕事だなと。

同時に、今の時代に合わせた進路指導に改革しなければならないという思いも根強く…。もっとこうなればいいのに、と思うことは尽きませんが、変えられるところから手をつけていきたいです。

＼ 三川先生からのメッセージ ／

不平不満に見える言葉は「希望や期待」の裏返し

変化の激しい時代だからこそ、生徒たちにはみずから深く考えて進路を選択してほしいと願っていらっしゃる大浦先生。その分「もう少し時間があれば、生徒一人ひとりと深く関われるのに」という心残りも強くおもちでしたが、一対一で向き合って話をするだけが対話ではない、とお気づきになられました。大浦先生に限らず、やることが山積みで、なかなか満足できるまで生徒と話がしきれずにもどかしく思っていらっしゃる先生方も多いかもしれません。しかし、ホームルームや授業など、一方通行に見える場面でも、生徒に問いを投げかけ、対話することはできるはずです。また大浦先生のお話のなかには、従来型の進路指導のあり方に対する厳しいご意見もありました。一見、不平や不満に見えるかもしれませんが、その言葉には先生自身の「こうあってほしい」という理想像が表れています。不平不満は、希望や期待の裏返し。生徒や保護者から不平不満が挙がったときも、言葉をそのまま受け取るのではなく、その人がうちに秘めている希望の姿や、実は期待していることとは何か、と考えてみてください。

本連載で三川先生と対話してくださる先生を編集協力委員のなかから募集しております。ぜひ、編集協力委員にご登録ください。詳細は66ページをご覧ください。